



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学教育GP

質の高い大学教育推進プログラム

公開シンポジウム

討議について

2010 3.1.mon
15:00~17:00

東京大学駒場キャンパスI 18号館ホール

主催:東京大学教養学部附属教養教育開発機構

討議する

「日本の学校文化では、生徒が質問をするということとは、先生の説明の仕方が悪かったということ、質問の余地なく全部わからせることが良い教え方とされてきたのです」

「授業におけるディスプリンによって、ディスカッションの形や取り入れ方は大きく違ってくるはずだ」

「授業をどう作るかということとは、学問あるいは学術をどう身に付けていくかというスタイルそのものを自分の中でも根本的に変えていくことにつながります」

「理系の問題というと一般には、一義的な解しか出ないと思われていますが、決してそんなことはありません。議論を行う余地はあります」

「うまくいっている例は全体に共有されなければ意味がないわけで、同僚性をどう広げていくかというのは大きなテーマになると思います」

「ALESSのプログラムには10人の外国人の教員がいますが、同僚性がうまくいっている要因は、主に雇用形態にあると思います」

「議論をさせる中で学生のプライドや競争心、あるいは向上心といったものを上手く働かせて、学習効果が高まることがあります」

「かみ合った議論をするためには知識の引き出しも必要ですが、そのためには相手の言うことを理解することがまず必要です。さらには瞬発力や場数も必要でしょう」

「問題は、いかに学生に学ばせるか、頭を使わせるかというところであって、そのためには先生が教え方だけ変えてもだめなのです」

東京大学教育GP

質の高い大学教育推進プログラム
公開シンポジウム



2010 3.1.mon
15:00~17:00

東京大学駒場キャンパスI 18号館ホール

主催:東京大学教養学部附属教養教育開発機構

ごあいさつ

東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 教授

山本 泰



本日のシンポジウムは、私たちが今進めている教育GPという文科省の取組の中間報告会を公開で行うものです。

私たちの取組は、討議というものを大学教育の中で積極的に活用していくという目的で進められているものです。教養学部では毎学期、1000から1200の授業が開講されています。それらの授業はさまざまな形で行われています。8割程度は講義形式の授業ですが、それ以外に演習や実習、実技があります。しかし、演習といっても討議という形で議論を深めることができるかという、実際はそうとも言えません。学生がレジュメを見ながら本の中身について話をしても、他の学生が読んでいないのでディスカッションにはならず質問で終わる、という演習も多く見られます。

こうした中、討議力をプロジェクトの看板に掲げるようになったきっかけは、教養学部が毎年、年度末に行っている授業出口調査でした。出口調査は教養教育が終わった2年生の時点で、どういった学力が身に付いたと思うかを学生に書かせるアンケート調査ですが、そこで討議力に関して「とても身に付いた」と答えた人は3%しかいませんでした。討議する力はさまざまな能力を総合するトータルな「学ぶ力」に最も深いところで関わっています。しかし、アンケートの結果、他者と討議をする力がまったく身に付かなかったという結果が出たのです。「学ぶ力」を身に付けるための最も重要な能力である討議力が一番弱い。

本教育GPはこのような現状を鑑みて、先生が一方に知識を伝達する授業から、学生が能動的に参加する、あるいは学生同士が議論を通して互いに学びあう授業への方向転換

を目指しています。こうした方向性は今「ラーナーセンターズエデュケーション」とか、「学び手中心の教育」というような言葉で表現されています。本教育GPは、そのような方向へ教育全体を変えていくことを目指しています。

本日は3つのテーマについて順次議論をしていきたいと思っています。1つめは先生の教育力をどう高めていくか。そのためにどういう手法があり、どういう道具や環境が必要なのかといったことです。2つめは学生の学ぶ力をどう高めていくか。結果として高まるということだけではなく、それ自身を高めるということがどうしたらできるのかということです。3つめは、先生の教育の質というものはどうやったら計ることができるのか、あるいは学生の学ぶ力というものをどういうふうにして計れるのかということ。大学では先生の教える力を学期末の学生による授業評価アンケートを通じて計っていますが、もう少し違った形、もう少し内在的な計り方はないのかということを考えています。

本日は、外部評価の先生方からご意見を頂戴し、それに対してわれわれが意見を述べ合うというプログラムで進めさせていただきたいと思います。議論に入る前に、東京大学の理系学生の1年生を対象にしたアカデミックライティングの授業、ALESSで行われているピアレビューというプロセス——これは学生同士がお互いからお互いを学び合う、お互いに教えあうというものです——を紹介したDVDを見ていただきます。その後、これについてのご意見も含めてディスカッションを進めたいと思っています。

Contents

ごあいさつ

山本 泰 東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 教授

2

パネルディスカッション

討議について討議する

6

ディスカッサント

松下佳代 京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

安永 悟 久留米大学 文学部 教授

川嶋太津夫 神戸大学 教育センター 教授

モデレータ

山本 泰 東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 教授

資料

授業の中での討議力養成 HINTS5

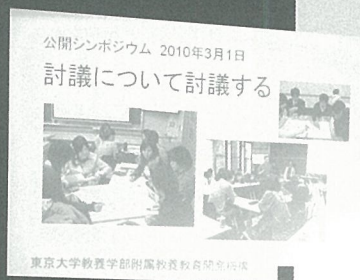
29

他の先生方の工夫を目に見える形で

岡田晃江 教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授

48

討議について



パネルディスカッション

討議について討議する

ディスカッサント

松下佳代 京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

安永 悟 久留米大学 文学部 教授

川嶋太津夫 神戸大学 教育センター 教授

モデレータ

山本 泰 東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 教授

Panel

Discussion

討議する



Panel Discussion

パネルディスカッション

討議について討議する

「授業におけるディシプリンによって、
ディスカッションの形や取り入れ方は大きく違ってくるはずです」

知識を身に付けることと ディスカッションを どう両立させるか

【山本】本日は3つの業界の方に来ていただいています。それに加えてさらに5人の参加者がいます。まずは松下先生と安永先生と川島先生に、自己紹介をお願いしたいと思います。

【松下】京都大学の高等教育研究開発推進センターの教授をしております松下佳代と申します。今日はディスカッサントということで参加させていただきました。私は、討議力の専門家ではありませんが、大学教育全般については知っていますので、自分の実感に即したことからお話したいと思います。

私の専門は教育方法学という分野です。2002年に今のセンターに来まして、それまでは主に初等中等教育の教育方法の研究をしていました。今でも二足のわらじと言いますか、主に小学校のフィールドに入って授業の研究をしたり評価の研究をしたりしています。実は、この東京大学の教育GPに関しては審査時点から知ってしまっていて、最初にPISA対応の討議力という取組を見た時には「ついに東京大学もここまで来たか」と思いました。というのは、初等中等教育ではPISAという概念が既に入ってきていて、PISA型学力やPISA型読解力、あるいは「習得・活用・探求」といったことが非常に重視されているからです。初等中等教育では「教えから学びへの転換」ということが大学よりもっと早く、90年代の初めぐらいから言われてきたので、研究している者にとってはけっこうなじみのフレーズなのです。それが大学に入ってきた時にどういう形になるのかというところは非常に関心があるところです。しかも東京大学という日本を代表する大学でそれがうまくいけば、他の大学

にも非常にインパクトを与えることになるので、そのなりゆきには非常に関心を持っていました。

本日これからみなさんと議論したいと思っているのは、ディスカッションについてです。小中学校でもディスカッション形式の授業はたくさんあって、私も子供たちが中心になってどんどん進めていくようなタイプのものや、平均の概念のような数学的な観念をディスカッションを通じて作り出していくような授業を見てきました。今日はそれらと大学のディスカッション教育がどう異なるのかということを明らかにしていきたいと思っています。まず思うのは、大学の場合はディシプリンが非常に明確にあるということです。東京大学のものではこのことが最初から明確に主張されています。従って各ディシプリンにおいてディスカッションの形や中身は違ってくるはずです。例えば先ほどのALESSのDVDで言えば、これはやはりアカデミックライティングという授業の中でインタラクションをいかに取り入れていくかということを目的としています。また、理科系、文科系の授業でも、それぞれ違ってくるでしょう。

私のセンターで昨年9月に、カール・ワイマンというノーベル物理学賞を取った方をお招きしました。この方は北米では研究者として超一流であると同時に、物理学教育でも非常に有名な方です。彼の物理学の初年次教育の授業を拝見したところ、仮説実験授業という、以前から日本の初等中等教育で行われているものと非常に似た形式のものでした。まずある問題に関していくつか選択肢があり、それをめぐって議論をした後で、最後に実験をします。こうした点は日本で行われているディスカッションと似ています。ただし非常に異なっている部分もあります。まず規模がまったく違う。こちらは学生数が300人ぐらいの大講義でそれをやっています。その大人数でどのように議



松下佳代

京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

論をするかという、いくつかディスカッショングループを作って、そこを教員がまわりながらディスカッションを刺激していくというやり方をとっていました。実際に机の上で実験をする場合もあります。彼らは実験のシミュレーション教材を作っていて、ウェブサイト上で無料で公開していますので興味がありましたらぜひご覧になってみてください。

それから、特にこれはどの分野の先生でも悩まれるところだと思うのですが、講義、つまり知識を身に付けることとディスカッションをどう両立させるかということですね。カール・ワイマン曰く、「アメリカでは——今彼はカナダのプリティッシュコロンビアにいらるのですが——授業外学習をするのは当たり前なので、この授業のために学生は授業時間の数倍の時間がかかる予習を事前にやってくる」とおっしゃっていました。ですので、むしろこの学生達は授業ではディスカッションに集中し、それを補う知識は授業外の自習や、TAも参加するディスカッションやグループワークの時間を使って学んでいます。ところが日本の大学では、ほとんどの場合1週間に1コマ90分の授業しかありません。その中で講義とディスカッション主体の授業をどう組み合わせればいいのか。これが日本の大学の授業で討議力を育てていく際の、非常に大きなポイントになるんだろうと考えています。カリキュラムの形式としては、例えばアメリカと同じように1コマ50分の授業を週何回かやり、講義とディスカッションを組み合わせるのか、それとも、日本の現行のカリキュラムにそって1週間1コマの授業の中で何か工夫をしてやるのか、授業と授業外の組み合わせなども考えながらやっていけるのかどうか、そのあたりも本日の大きなテーマになるのではないかと思います。

【山本】たしかに松下先生がおっしゃるように、ディスカッションを効果的に取り入れるやり方はディシプリンによって違ってくる

し、何のためにそれを取り入れるのかという目的も変わってきます。あるいは1つの科目でもいろんな演習があったり、目的の違う授業もありますので、そのあたりを一つ一つの科目ごとにカスタマイズしていくということですね。それと、時間割ということ言えば、アメリカの標準的な大学生は、各学期4科目ぐらいいくつか授業をとりませんが、同じ授業が週3回あったりします。このようにカリキュラムの構造が違うところで同じようなことができるかどうかということは、大学でディスカッションを取り入れていくにあたってとても重要なご指摘だと思います。この2つの点についてはまた後で議論をさせていただきたいと思います。では安永先生、お願いします。

討議とは 互恵的な人間関係に基づく 学びのための話し合い

【安永】久留米大学の安永と申します。久留米大学というのは、九州の福岡県にありまして、天神から30分ほど電車で走ったところにあります。田園地帯の中の大学です。大学自体は5学部ありまして、4学部が文系で1学部が医学部ということで、医学部を中心として発達してきた大学です。その中で、私は文学部の心理学科に所属して、教育心理学を専門にしています。私が現在行っている一番大きな活動とは「協同教育」です。みなさん方の中には「協同教育」がどういう概念かご存知ない方も多いと思いますが、私どもは2004年に協同教育学会というのを立ち上げ、そこを基点として活動しています。一言で言いますと、お互いが高めあうことを目的とした、互恵的な人間関係に基づく教育ということです。お互いが討論をしな

Panel Discussion

パネルディスカッション

討議について討議する

安永悟

久留米大学 文学部 教授



がらお互いに高まりあっていく。それによって良い授業をしていきたいと思います。互恵的な良い人間関係をベースとした教育だということです。

これは今まで日本になかったことかというそうではありませんで、古くから協同学習という言葉で言われていた分野になります。しかし、子どもが協同学習と呼ばないのは——もちろん協同教育の中に協同学習は含まれるんですが——必ずしもグループを使わなくても、今お伝えしたような互恵的な人間関係に基づく教育というのは可能であるという観点からなんです。本日私がここにご招待された一番大きな点は、「協同学習というものは基本的に話し合いだろう、そうであればそれは討議に通じるんじゃないだろうか」ということだと思っています。しかし、上で言った意味で、討議というものをまずどういうふうにとらえていけばいいかということは非常に考えさせられるわけです。

さしあたってここでは「学びのための話し合い」ということに限定しておきたいと思っています。そういった時に、さきほどは必ずしもグループは使わないと言いましたが、グループやペアで学習することは少なくとも非常に効率的であることは間違いありません。特に現在PISAで読解力などが問題になってからは、ディスカッション形式での協同学習に関する関心が非常に高まっています。

協同学習に対する関心がなぜここまで高まってきたのか、4つほどその理由を挙げることができるかと思っています。1つは効果性です。いわゆる一般的な講義もしくは競争をベースとした教育よりも効果が高いということが実証されています。非常に多くの理論や実践から実証されているのです。それから、大学生を受け入れる社会が、生産的な活動をチームワークをきちんとやっていける志やレジデンスを持った学生を求めている

ということ。3つめとしては異質性の受容です。今大学にはさまざまな多様性を持った異質な学生たちが入って来ています。こういう多様な学生たちを、単に学力が低いからといって切り捨てるのではなく、協同学習によってその異質性をうまく授業の中に組み込むことができるのではないかと考えています。4つめは主体性です。多様な学生を、最終的には、生涯にわたって学ぶことができる人材に育てないといけない。そこで主体的な学習者を育成するためには、協同学習というものが有効だろうということが言われているわけです。これらの特性を持っている協同学習というものが、今、幼稚園から大学、さらには大学院まで入ってきているということです。

本日、東京大学に来てさまざまなものを見させていただきました。その時に、とてもほっとしたことがあります。松下先生と同じく、私も小学校や中学校に入って授業作りをしているのですが、本日ここで話されていることのほとんどが小学校中学校でもやられていることです。このことは、教育にはいわゆる不易というものがある、ということの意味していると思うわけです。教育には流行があるんだとよく言われますが、まさに教育におけるそうした不易の部分が、この東京大学を1つのステージとして、今、展開しているんじゃないだろうか。そういう意味では、とても今日のシンポジウムを楽しみにしております。

もちろん、さまざまな問題点はあろうかと思っています。後でまたみなさんと話し合っていきたいと思っていますが、例えば、さきほど見たALESSのピアレビューのDVDですが、どうも私にはあまりにも完璧な世界に見えてしまうのです。これがずっとできていたら、私たち、いや少なくとも私にはコメントすることはありません(笑)。しかし実際に先生方とお話をしていると、何か映っていることと違う部分もあるんだなと感じるところがあるわ



「うまくいっている例は全体に共有されなければ意味がないわけで、同僚性をどう広げていくかというのは大きなテーマになると思います」

けです。あの裏に隠れている、というよりも、ああいうものを作らざるをえない理由というものが少しずつ見えてくると、またいろいろディスカッションができるかなと思っています。

一方、ガリー先生が非常に上手に授業をされているのを敬服しながら見ていましたが、教師の持っている役割、ああいうピアレビューをやっていく上での教師の役割というのは、どうなっているんだろうか、どう考えながらやられているんだろうかということは非常に気になっています。ガリー先生が行っているようなこうした方法は全体に共有されなければ意味がないわけで、同僚性をどう広げていくかというのは第1のテーマになると思います。実は小学校・中学校でもまったく同じ問題がありまして、同じ職員室の中にも、なかなか交流ができないということが多いのです。学年だとか教科の壁があります。同様に大学の先生にも研究室や学部の壁などさまざまな壁があると思うのですが、そこを乗り越えて、同僚性をどう培っていくのだろうか、いけるのか、もしくはいこうとしてののか、というところが非常に知りたいなと思っていますところ。

それと、山本先生が使われる「モジュール」という言葉は私の言葉で言うともしかしたら「スキル」となるかもしれません。私どもは協同学習のスキルとか技法と言ったりするんです。しかし、この討議というものを学び合いの力と定義した時に、スキルが伝われば本当に良い討議が、あるいは良い学びができるのだろうかという気持ちがあります。先ほどのDVDなどを見ると、東大生は討議ができてるように見えるのですが、山本先生の調査によると非常に討議力が不足しているとおっしゃっている。あるいは教養学部長の山影先生も授業後に質問ができない学生が増えているとおっしゃっていました。ここに非常に大きな解決すべき問題が横たわっているんじゃないだろう

かと思っています。またいろいろと先生方のご意見を聞きながら、私なりの考えをご披露していきたいなと思っています。ありがとうございます。

【山本】さすがに専門家はちゃんと裏までお見通しという感じで怖いですね(笑)。あれが本当にできていたら理想ですよね。もちろんそんな事はありません。しかし、むしろそれでいいのではないかと思います。私はよく「東大生ってどういう学生さんですか」とか、「どういう本読んでますか」って聞かれるのですが、そういう時は「いや、東大生というのは普通の大学生です。どこから見ても、普通の大学生」と答えています。本日も会場には手伝ってくれている学生がたくさんいますが……どうですか？ 普通ですよね？ そういう意味では東京大学も普通の大学になりつつあるんだと思うし、私はそれはそれでいいことではないかなと思います。東大生には東大生なりの社会的なポジショニングがあり、重い責任があるということはもちろんそうですが、世の中の動きの中でちゃんと呼吸をしたり、世の中で普通に通じる言語で話す、ということは本当はものすごく大切なことです。そうじゃないと、ジェネリックスキルなんて身に付くわけじゃないですね。だからその方向に向かいつつあるというのは、私はいいことじゃないかなと思っています。ピアレビューの話は、後ほどガリー先生と安永先生でたっぷり話し合っていたきたいと思いますので、川嶋先生の方から、最初の口火を切っていただけると。

学生が理解できていない原因を 学生に求めるのか それとも自分の教え方を反省するのか

【川嶋】神戸大学の川嶋でございます。私に期待される役割

Panel Discussion

パネルディスカッション

討議について討議する

「問題は、いかに学生に学ばせるか、頭を使わせるかというところにあって、
そのためには先生が教え方だけ変えてもだめなのです」

は何か、実はわかっていないのですが(笑)、お話させていただきたいと思います。今の2人の先生のお話と少し重複するところがあるかもしれませんが、初年次教育を東京大学が始められたというのを聞いた時は思わず「えっ?」と思いました。先ほど松下先生もおっしゃったように、東京大学も初年次教育をやらざるを得ないのかということで、日本の大学も変わってきたのかという印象を持ったのです。しかし今回のGPの試みを聞いていると、これは東京大学だからこそできるプロジェクトだなと思ったりもしました。つまり、東京大学も変わりつつあるという印象を受けつつも、実際本当に深いところまで変わっているのかなというのが私の総括的な疑問です。先ほどの安永先生と同じで、こういう試みがどれくらい広がっていくのか、根付くのかというのがやっぱり——これは東京大学だけではありませんが——大学の改革にとって一番大きな課題ではないかと思っています。

少し話が飛びますが、かつて立花隆という作家が、「東京大学の教育は、からっぽの湯飲み茶碗に湯を注ぐようなものだ」と批判していました。つまり、非常に碩学と言われる東京大学の先生が優秀だけれども受験知識しか持っていない新入生に、ご自分の専門知識を、まるでからっぽの湯のみにお湯を注ぐようにどんどん詰め込んでいくのが、東京大学の教育であるということです。東京大学の学生はいろんな知識を持っているかもしれないけれども、卒業してから本当に、自分でものを考えて行動できる人間になるのだろうか、そういう意味でおっしゃったんだろうと思います。しかし今日お聞きしていると、今回のGPは単に知識を空っぽの湯のみに詰め込むじゃなくて、その知識を1人ひとりにどう活用させ、社会や地球の課題に挑戦できるような人材をどう作っていくのかという、非常に壮大な試み

であると感銘を受けています。

どうやって先生方の意識を変えていくのか、あるいはこういう試みを広げていくのかという一番の大前提については、山本先生もおっしゃっていたように学生中心ということだろうと思います。われわれ教員は学生の学びに関しては悲観的になることから考え始めますが、学生の学びを中心に持ってくるのが、この問題を考えるきっかけになるのではないかなと思います。これは私に限ったことかもしれませんが、後期試験も成績評価も終わると、いつもながら「こんなにいろんなことを教えたのに、何で試験とかレポートになるとできが悪いんだろう」と思います。

これは毎年のことです(笑)。東京大学の先生だったら学生はそもそも優秀ですから、学生の頭が悪いとかやる気がないとは思わないのでしょうかけれども、大衆化した大学になりますと、学生はクリティカルシンキングなどの能力を持って入学してくるわけではありません。そうなると、こんなに成績、あるいはレポートのできが悪いのはむしろ自分の教え方が悪いのかなと自己反省して、次の学期からはちゃんと工夫して、教え方を改善しなきゃいけないと思ったりしてしまいます。つまり、「理解していない」、「できない」という時に、どこに原因を求めるかというと、学生か教員のどちらかに求めるしかないと思うのです。

今の学習理論では、構成主義的学習感、つまり知識とか意味というのは1人ひとりの頭の中で常に作り変えられているので、学生が学びにエンゲージメントしないことには、ものを理解したり行動を変えたりすることはできないと言われています。だから問題は、いかに学生に学ばせるか、頭を使わせるかというところにあって、そのためには先生が教え方だけ変えてもだめなのです。いかに学生に学ばせるようなエンカレッジメントや環境を整えるかというのが大学や教員の役割ではないかと。もちろん



川嶋太津夫

神戸大学 教育センター 教授

本日見学させていただいた討議用教室も、学生を学ばせるための1つの環境整備です。しかしああいう教室を作ったから学生がきちんと学ぶかどうかという、そこは大前提として先生がきちんとケアしなきゃいけない。見学の時に山本先生から、「この施設を使いこなせるのは、こちらの先生(ガリー先生)だけだ」という話がでしたが、そこはやはりFDということで、他の教員とも共有していけるようないろいろな研修が必要です。ただ、最終的にやはり物事を考える、あるいは行動するのは学生です。だから私たちが干渉できないですね。だから逆に言うと、学生にも責任があるわけです。教員が教え方が下手だとか環境整備を十分してないというだけじゃなくて、学生が、自分たちが何者なのか、何のために大学に来ているのかを、大学や教員がきちんと伝えるべきだろうと思うのです。FDというと教え方の研修ということばかりが強く言われていますが、学生にも大学の学び方というのをきちんと——これは初年次教育ということになるのかもしれませんが——高校までの学び方とどう違うのかということも教えていかなければいけない。さきほど小学校・中学校と学び方は同じだという話がありましたが、日本では高校でがらっと様子が変わってしまうので、大学での学びはどんなものかということを改めて、大学や教員が指導するというのも必要なのではないかと思っています。

いろいろお聞きしたいこともあります。1つは、山本先生が実施されている試みをいかに——少なくとも東京大学の中で——根付かせていくのかということと、もう1つはアセスメントと言いますか、1人ひとりの学生がここで討議力の育成を学習目標にした場合、実際に1人ひとりの学生さんが討議力をアウトカムとして身に付けたかどうかをどうアセスメントしていくかということです。東京大学では出口調査ということで、自己評価を

アンケート調査でチェックされています。教員側から見た場合をアウトカムベースで言うと、アウトカムという学習目標を学生に身に付けさせるためにカリキュラムや教育活動・学習活動をどうデザインし、それが達成できたかどうかをどうアセスメントするということです。しかし学生側から見ると、学生はシラバスを見る時にどうやって成績を評価されるかというところを見るんですね(笑)。まず目が行くのはそこ。だから討議力をアウトカムとして育成したいのであれば、まずアセスメントをどうするかということ、つまりこの授業では何をどこまでやれば合格点をもらうのか、それはどういう活動を通じてアセスメントされるのか、それはきちんとそれぞれの授業で示されているのかどうか、ということをぜひお聞きしたい。

それから、これは最後に日本の教育システム全体に関するのですが、松下先生もおっしゃっていたように、1学期で10種類もの異なった科目を週1回ずつで学ぶということは、理解度という点では大きな欠点だと思います。アメリカの先生に週10コマ以上の違った科目を受けているという、本当にそれで学びができているのかとびっくりされます。今日本はセメスター制になって1つの授業で2単位取れるのが基本で、ものすごく細切れのカリキュラム体系になっています。私は、今後学生にきちんとした学びをさせるためには、2単位科目ではなくて3単位科目とか4単位科目にして、週に複数回同じ授業を受けさせるというように変えていくようにした方がいいと思っています。ただしその場合に考えなければいけないことが1つあります。アメリカでそのような形になっているのは、授業料とリンクしているからです。1学期の登録コマ数である4科目ないしは5科目が標準授業科目数になっていて、それより多く受ける場合はプラスアルファの授業料を払わなければいけない。ところが日本

Panel Discussion

パネルディスカッション

討議について討議する

トム・ガリー

東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 ALESSプログラム 准教授



だと、国立大学で一律52万8,000円ということになっています。食べ放題のレストランに行ってできるだけたくさん食べようと思うのと同じで、受講する側は当然「52万8,000円払っているんだから、できるだけたくさん授業をとってみよう」と思います。単に単位数を変えとかカリキュラムを変えるだけではなくて、授業料制度とか、いろんなシステム全体を変えていかないと、日本の大学教育は本当の学びを中心とした制度にならないのではないかと思います。

教育方法はいつまでたっても 完璧にはならない 進化し続けるもの

【山本】お三方の話で、今から議論すべきことの種はできたとありますが、その前にガリー先生に、簡単な自己紹介と、本日の会議での抱負を述べていただきたいと思います。

【ガリー】さきほど、この画面で大きく出ていたトム・ガリーです。DVDの中では俳優として出演していましたが(笑)、実際には今はALESSの授業は教えていません。現在はALESSプログラムのマネージングディレクターとなっています。

もしよろしければ、まずは安永先生のご質問に簡単に答えたいと思います。まず、DVDの作成の裏に何があったかということですが、ひとえに私の怠慢です。というのは、外国語のライティングの授業で伝統的な方法は、学生たちにレポートを書かせて、先生たちがそれを添削するというものです。冠詞を入れたり動詞の活用を直したりといった赤入れをしてそれを学生に返すという方法ですが、私は実はライティングを教えるのは大好きですが、添削は大嫌いです(笑)。過去の経験から言って、

丁寧に直して学生に戻しても学生はそれを見るかどうかかわからないし、自分の研究室の前の箱において取りに来てくださーいと言っておいても、何ヶ月も置かれたままになっている場合も多いのです。ですから2年前にALESSのプログラムを立ち上げた時に、新しく雇う教員たちにそういうことをさせるのは申し訳ないと思いました。

もう1つは、ALESSは毎週宿題を出すというカリキュラムを組んだので、必然的に教員の負担が増えるということがありました。毎週1人の教員が、80～100人の学生の論文を添削するのは、不可能です。みんな死んでしまおうか辞めてしまおうかと思います(笑)。そこで、以前から外国教育の分野の中でピアレビューという方法があったのを思い出し、あまり深く研究しないままピアレビューやろうと決めました。ただ、具体的な方法は何も検討しないで、とりあえず最初の学期にやってみたところ、学生から非常に低い評価が出ました。ピアレビューは役に立たないとか意味がわからないとか……。そこで、ピアレビューをどう行えばいいのかということを教員の中でいろいろ考えて、次の1年間は、授業の中でピアレビューのチェックシートのようなものを与えてみたのです。そうやっていろいろやってみて、その結果として、学生にピアレビューの目的とやり方を教えようということになり、このDVDを制作しました。台本は教員たちが自ら書きました。これを使い始めたのは2009の10月からですが、ずいぶん効果があったと思います。最初の方の授業で学生に見せると、学生たちは何をやればいいのかがあるので、それ以来ずいぶんスムーズに授業が進むようになりました。

また、さきほどのもう1つのご質問、同僚性はどうするかということですが、ALESSのプログラムには10人の外国人の教員がいますが、同僚性については非常にうまくいっていると自負し